一遍を蘇らせた現代の一遍

捨聖を訪ね歩いた男の生涯

一遍に退職金をつぎ込んだ男

元号が昭和から平成に変った今から四年前のことである。松山に拠点を置く文芸同人誌に入会した私は、会の同人で初老のある男にしだいに魅せられるようになった。いつもハンティング帽のその男は足助威男（あすけたけお）という。もともと東京の人である。愛媛で教師をしていたが五十の歳にあっさり教職を離れ、妻帯もせず、七十二歳になる今日まで一遍の研究に打ち込んできた人である。現代の「捨聖」だという人もいる。

しかし、不覚にも私は同人誌に入会した当初、足助威男が一遍を現代に蘇らせた研究家の一人として世間で高く評価されていたことは知らなかった。そもそも私が足助に関心を抱くようになったのは、かれの両手であった。冬から春の間、月一度の会の席で見かける足助は、指の部分を切り取った軍手を両手にしたままメモを取り、コーヒーを口に運んでいた。終始無言である。が、それでいて確かな存在感があった。かれの両手の軍手が白い包帯に替った五月の連休明けの会の時、私の好奇心は頂点に達していた。私は両手の包帯のことを足助に訊いた。「弱ったなぁ」と、かれは眼鏡の奥の小さな目を瞬（しばたた）かせた。それから、皆には交通事故の後遺症で手がしびれることにしているのだけどと呟き、さらりといった。「土から仏をつくってますから、それで土にふれない間は手をくるんでおくんです」。次の例会の時、足助は私に作陶写真集を持ってきてくれた。かれの手になる様々な「掌上仏（しょうじょうぼとけ）」を眺めるうちに、私は足助威男という人間に魅了されていくようになった。

一遍の姿を求め日本中を旅することを決意し、足助威男が教職を離れたのは昭和四十五年のことである。退職金は二百十万円だった。これを七十万ずつ三つに分け、三年間かけて旅をし、その果てに死ぬことがあっても本望だとかれは思った。

旅衣　木のねかやのねいづくにか　身のすてられぬところあるべき

一遍のこの歌が、足助の目指す旅であった。

世間のしがらみは何もなかった。が、足助は自分の人生の課題にひたむきに向き合って生きてきた人である。課題にあまりにも誠実であるがため、世俗的なことを捨てたともいえる。戦争の最中、臨終の床で父の直次郎が問うた「道元はわかるか」という言葉が、この小柄な男の中にずっと生き続けていた。直次郎は金澤庄三郎博士と共に、『廣辭林』の編集者として後世に名を残した漢学者である。もう一つ、戦後の混乱期に足助は左翼運動にかまけていて、母を栄養失調で死なせてしまった。それで山頭火と類似した思いが足助の中にいつもある。いつか、贖罪（しょくざい）の旅に出たかったのだ。足助威男にとって一遍上人との出会いは、いわば宿命といえるものだった。かれは東京から伊予の地へ自分がやって来たのは、一遍に出会うためであったと信じている。

時宗開祖一遍は、道元が永平寺を開く五年前の一二三九年伊予道後に生まれ、鎌倉時代末まで日蓮とほぼ同時代を生き、修行と教化のため諸国を歩いて果てた捨聖である。一遍の遊行の旅は三十六歳で再出家した時から始まり、五十一歳で示寂（しじゃく）するまでの十五間に及ぶ。その範囲は、北は岩手県の北上から南は九州の大隅半島までほぼ日本国中に達した。一遍の教えは踊り念仏をとおして民衆の中へ浸透し、鎌倉時代末から室町にかけて、日本中が踊躍（ようやく）歓喜の熱気に包まれていた時期があったのである。

一遍はこの頃、日本一の有名人でもあった。多くの祖師の中でも、本人と同時代の人々に貴賤を問わず受け入れられ、その名を知られた僧は一遍をおいて他にいないのではないだろうか。一遍は人間の中に巣くうもろもろの欲を捨て果てて念仏賦算（ふさん）に生き、六字の名号（南無阿弥陀仏）になりきった旅人であった。一遍の生涯と言行を伝える『一遍聖絵（ひじりえ）』（六條縁起）は、日本の絵巻物の中の白眉といわれるほど自然や時代風俗の写実に優れ、美術史の名品として価値が高い。足助は『聖絵』を見ると、何かを一心に見つめ旅する一遍の姿に胸が熱くなり、ともすれば涙を落とすことさえある。日本人が失ってきたものが、そこにある気がしてならないのだ。一遍の姿がたまらなくなつかしいのである。一遍の旅姿こそ、人間の姿そのものでなかったか。

ところで、今日でこそ鎌倉浄土教の完成者として一遍は鎌倉新仏教の祖師たちと並び称されているが、足助が一遍の足跡を訪ねる旅を始めた昭和四十五年当時、世間には一遍への関心はほとんどなかった。戦前の著書では、藤原正の『一遍上人語録』と、時宗宗学林教授で時宗教学の最高権威浅山円祥の労作『一遍聖絵・六條縁起』があるくらいだ。戦後になって、柳宗悦が名著『南無阿弥陀仏』の中で、一遍なくして日本浄土思想史の結末はないと断言し、その思想や人間像を世に紹介した。また唐木順三は『日本の心』の中で一遍を取りあげ、きわめて日本的な詩人思想家として再発見し、世にもっと顕(あら)われるべきだと述べている。

しかし、これらはまだ例外で、巷間では、一遍は鎌倉時代の乞食坊主ぐらいに思われていた。事実この頃、『聖絵』をめくって、なんだ出てくるのは乞食ばかりじゃないか、と言った学者もいる。その程度だったのである。

足助は『聖絵』や先の書物をとおして、伊予の豪族の家に生まれた幼名松寿丸が、やがて仏門に入り、隨縁から智真、そして一遍から全てを捨て六字の名号だけへと自らを変容させていくすさまじい生き様を知った。かれにとって一遍の存在が無常の底から自己を救い上げる唯一のものとなっていった。

五十男に冷たい視線

戦争中、足助と共に中国徐州県の顧問として合作社運動にたずさわっていた時の友人から、遊びに来ないかと誘われふらり愛媛にやってきて、そのまま山奥の中学校の教師になった。昭和二十五年、足助が三十歳の時である。以来二十年間の教師生活だったが、養護施設八幡浜学園の五年間は、足助にとって最も充実した楽しい時であった。成績評価のことで管理職と対立し、評価のない学校へ行きたいという足助の希望にそうかたちで学園へ赴任してきた。

精神発達遅滞児たちと共に過ごす中で、「これが教育だ。教育は学力でなく、人間性をつくることだ。人は一人で生きられない。命はみんなで育てなければならない。片隅の子をつくってはいけない。片隅の子のためにこそ教育はある」と、足助は確信した。一緒にウサギやニワトリを飼い、川で遊び海で泳ぎ山に登った。花壇の手入れをしていた時、通りかかった近くの中学生の一団が、ここはバカ学校だと口々にはやしたてたことがあった。道路に駆けあがった足助は、引率の教師の謝罪だけでは怒りがおさまらず、中学校へ押しかけ校長に謝らせた。学園の子供たちの無垢(むく)な顔や澄んだ瞳は、足助が追い求める一遍の姿につながっていくのである。

学園を退職した足助は、一遍生誕地の道後の宝厳寺から温泉街へ少し下った

ところにあるアパートの一室を借りた。アパートは、宝厳寺の末寺の円満寺の狭い境内の三角形の敷地に建っていた。二階の足助の住まいは、文字通りの三角形だった。六畳ほどの畳の部屋の隅に雑多な書籍を積み、体一つ空いた場所に布団を敷き、リンゴ箱を置いた。家賃は七千円である。

宝厳寺には毎日足を運んだ。しかし、まだうら若い大黒が判で押したように住職は留守だという。寺は昼間でも閉門している日もあり、裏口から境内に忍びこむと、人の気配がまるでない。近所の人が事情を話してくれた。住職は小学校の教師を兼務していた。住職だけでは、とても食べていけないのである。教師の仕事一本にしぼりたいので代りの者が来るまでの間つなぎなのだという。学校が忙しいから、少しヒマになるまで待ったらどうかということになった。しかしよくよく情報を集めていくうちに、時間がないのではなく、向こうが足助に会うのを面倒がっていることがわかった。それでも半月後やっと会うことができた。まだ若く僧侶というより勤め人の雰囲気がする住職を見て、足助は成(なる)程(ほど)と思った。本堂で一遍上人の木像（国指定重要文化財）を拝観し、足助はあっと息をのんだ。はだしの足にそっとふれてみる。十五年間、日本中を歩きとおした足である。「老いらくの恋」で名をはせた歌人川田順のことがすぐに浮んだ。

足助は苦悶の恋の末に鈴鹿俊子と結ばれた川田が、歌集『東帰』の中で、「庭さきに七厘すゑて煮炊する妻のすがたも目馴れ来にけれ」と詠んでいるのを、どこかで読んだ覚えがあった。さらにそのころ、空家にしていた家に風を通すため時おり東京へ帰っていたが、立ち寄った神田の古本屋で見つけた歌集『越天楽』で、川田がこの宝厳寺の一遍像を歌った詩に出会った。人妻と恋に落ちた川田が、西行研究家としての名声も住友財閥の重役としてなした財もすべからく空しいと死を覚悟したころに、この一遍像と出会ったのだろうか。川田は次のような詩を残している。

「糞掃衣すその短く／くるぶしも脛もあらはに／草鞋も穿かぬ素足は／国々の道の長手の／土を踏み石を踏み来て／にじみたる血さえ見ゆがに／いたましく頬にこけおちて／おとがひもしやくれ尖るを／眉は長く目見の静けく／たぐひなき敬虔をもて／合せたる掌の先よりは／光さえ放つと見ゆれ／伊予の国伊佐庭の山の／み湯に来て為すこともなく／日をかさね我は遊ぶを／この郷に生まれながらも／このみ湯に浸るひまなく／西に行き東に行きて／念仏もて勧化し給う／みすがたをここに残せる／一遍上人」

足助は川田順が宝厳寺に参詣した年月を知りたいのだがと住職に水を向けた。が、住職はよくわからないと応えた。境内に出て、楼門から温泉街へ下る坂の屋並みを眺めた。かつて日清戦争に記者として従軍していた正岡子規が、療養のため帰松した時に、漱石を伴って坂の両側に立ちならぶ妓楼の遊女たちをひやかしひやかししながら宝厳寺にやってきた。子規はここで「色里や十歩はなれて秋の風」と詠んでいる。住職もこの句のことは心得ていた。しかし、その子規が『散策集』で、「ここは一遍上人の御誕生の霊地とかや、古住今来当地出身の第一の豪傑なり」と書いていることは知らない有様であった。ましてや町の人は、もって知るべしである。

勇んで松山へ出てきて、一遍のふところに抱かれるように宝厳寺に間近な処で起居しながら、そんな足助を待っていたのは、無頼な五十男に向けられる世間の冷たい視線と慇懃（いんぎん）な無視だけであった。足助は図書館の隅で終日、浅山の『六條縁起』をノートに書き写しながら旅への想いを温めた。世間と孤絶した日々の中、足助は瓢乎（ひょうこ）とした生き方に自らをなじませていった。このころのかれの句である。

伊予すだれ　人生小さく　また楽し

「道元はわかるか」と訊いた父

足助威男は七人兄弟の末っ子として大正九年、東京府小石川区音羽町に生まれた。生家は音羽御殿と呼ばれた鳩山邸の隣りである。足助の家は代々、周防岩国の吉川藩の貧乏家老であった。祖父の代に、東京へ越してきている。父の直次郎は宮仕えを嫌い、大村益次郎の研究と著述に明け暮れていた。鳩山一郎元首相の子息の威一郎（元外相）の名付け親は、直次郎だと言われている。

一家の生活は『廣辭林』の印税で十分食べていけた。直次郎は無口で、いつも書斎にこもっていた。その書斎を金田一京助や島村抱月が訪ねてくる。二十一歳上の姉の話では、直次郎と抱月は特に気が合う仲だったらしく、抱月は泊ることも度々あった。母のサクは、末っ子の威男を溺愛した。

三月の節句になると、奥の間の天井近くまで幾段にも雛（ひな）が飾られ、きらびやかであった。姉三人とは歳が離れていたせいもあり、雛飾りは威男のためにあるようなものであった。威男はうっとり人形たちを見上げ、人形と遊んであきることのない少年であった。足助は雛節句のころになるといつも、母が好きだった一茶の句が想い浮ぶ。

掌(てのひら)に餝(かざつ)て見るや雛の市――

足助の入学した京北中学は、肢体不自由児や今日でいう不登校児へも広く門戸を開放していた。足助は剣道部に入り、めきめき腕をあげ、剣道の達人とまで称されるようになった。学校の勉強はあまりしなかった。中学四年の修学旅行の汽車の中で、友人たちと奪い合うように回し読みした新聞で「お定(さだ)事件」を知った。阿部定の帯の間にはさまれたハトロン紙の中の「一物」は、足助に衝撃を与えた。

京北中学は「巌頭の感」を大樹に書きつけ華厳の滝へ身をなげた藤村操の母校でもあった。悶々たる肉欲の果ての手淫の快感と後めたさは、藤村の遺書の「不可解」の叫びとともに、足助の心と体を四分五裂にしていった。足助は上野の美術学校を目指す友人たちの部屋を転々とした。美術学校への進学を願ったが、直次郎は許さなかった。卒業を間近にした冬のある日、足助は父に呼ばれた。無口な父がいった。

「抱月は家に来るといつも火鉢の向こうで頭を抱え、困った困ったと嘆くせわしない奴だったが、あんな抱月でも若い時は必死で勉強したんだ。かれはね、歩きながら本を読んでいて垣根に頭をつっこみ、抜けなくなったことがあるくらいなんだ」

目的もなく拓殖大学へ進学した。一時、わからないまま西田哲学へ傾倒し、千葉県の鹿野山の神野寺にこもった。みそぎと座禅の毎日だった。直次郎は道元をすすめたが、道元の著作は難解で足助には手に負いかねた。卒業論文の制作にあたり、京劇の大家であった宮原民平教授に、「自分はライフワークを持ちたいが、何をしたらよいか」と足助は相談した。教授は即座に、「仏教語録がおもしろい」と応えた。足助はさっそく、藤原正校注の『一遍上人語録』を手にした。これが一遍との最初の出会いとなった。

昭和十七年の秋、父は病床についていた。枕元に座っている息子に、父はふりしぼる声で、道元はわかるかと訊(き)いた。足助は返事に困って黙っていた。父は目をつぶると、お前はダメだねといった。臨終の刻(とき)がいよいよ迫っていた。父は再び目をあけ、道元の言葉はわかるかと訊く。足助はしかたなくわかると応えた。すると父はとてもうれしそうな顔をした。そしてほどなく、父は死んだ。

戦争は激しくなっていた。大学に助手として残っていた足助は、小林秀雄の名作「無常といふ事」に出会った。次の文章は片時もかれの中から離れることがないものになった。
「この世は無常とは決して仏説といふ様なものではあるまい。それは幾時如何なる時代でも、人間の置かれる一種の動物的状態である。現代人には、鎌倉時代の何処かのなま女房ほどにも、無常といふ事がわかつてゐない。常なるものを見失つたからである」
中国の徐州県から大学へ合作社の顧問の依頼がきていた。昭和十八年の秋、足助はこれに応じ、母を姉に頼むと、門司港から中国塘沽行きの船に乗った。

乞食同然の独り旅

夏に、足助は市内の図書館をめぐり、全国の時宗の寺と所在地を調べた。昭和四十五年当時、寺は約四百ヵ寺、そのうち住職がいるのは三百ヵ寺ほどで、後は無住であった。一遍は死に臨んで、「法師のあとは、跡なきを跡とす」と言い、一切を焼き捨て、何も残していない。が、それでも一遍のものだといわれる 珠数(じゅず)、払子(ほつす)、袈裟(けさ) などが、わずかだが各地の寺院に所蔵されている。足助はこれらの宝物を拝観することを旅の愉(たの)しみにした。

一遍は文永の役から二年後の一二七六年、九州へ最初の遊行賦算の旅に出る。遊行とは衆生を化益し自らの悟りを開く旅である。一遍の九州への遊行は、孤独独一の旅であった。『聖絵』には、「七條の袈裟やぶれたるをたてまつれけるを腰にまとひて、只縁に随ひ足にまかせてすゝめありき給ひけり。山路に日にくれぬれば、苔をはらひて露にふし、渓門に天あけぬれば梢をわけて雲をふむ」とこの時の一遍の孤独の旅を伝えている。一遍はこの旅の中で、「孤独独一」の境地に達する。足助は、人生のこの真実をかれなりに旅の中で感じてみたいと願った。
一遍の旅から七百年後、足助も九州へ旅立っていった。旅の中で死ねるものなら本望だった。しかし現代の旅は、西行や一遍、それに芭蕉に代表される日本の旅人の再現というわけにはいかない。
足助の旅は、自分のための旅だった。気負わず自然のなりゆきまかせである。歩きたければ歩いた。バスがよければバスに乗った。列車のシートで眠り、目が覚めた駅に降り立ち、また歩き出す。九州へは臼杵から上陸し、国東(くにさき)半島の野仏や石仏を見て回った。宮崎県の西都原古墳群を訪ねていた時に、三島由紀

夫の割腹自殺を知った。気の向くままに南へ歩き、錦江(きんこう)湾を目にした日、南国の空に雪が舞っていた。

足助は九州の南端の鹿児島神宮（『聖絵』の大隅正八幡宮）に参詣し、隼人町の安宿にしばらく逗留(とうりゅう)した。昭和四十六年の年明けとともに北へ旅立つ。やっとの思いで訪ねあてた寺は廃寺が多く、荒れた境内につっ立っている足助を近所の人が不審な目で見ていることも度々であった。『三国名勝図絵』にある遊行松を見ようと探しあてた社では、庭に小さな切株が残っているだけだったりした。縁起や宝物を見たいと頭を下げても、何の肩書もなく、乞食同然の身なりの足助をまともに相手にする住職はまれであった。

足助は冬の間、霧島近辺の湯治場にこもり、大学ノートに一遍と自分の旅のことを書きながら、春を待った。道元は座して考えたが、一遍は歩きながら開悟し名号そのものになった。宿を発ち春の野道を歩いていると、直次郎の問いに今なら応えられると思う時がある。そんなときは、死なせた母への贖罪の気持ちもやわらぐのである。

「一遍は日本中をかけぬけた巨大な風であった。私は周囲三寸四方のため息にすぎない。しかし、小さな呼気の中にも、真実の音を聞くことがある。野の人一遍、詩の人一遍、民の人一遍、孤独独一の哲人一遍、さすらいの念仏行者一遍。一人の人間を発見することが、人生にとってどんなに大切なことか」と、初夏球磨川上流の炭焼小屋で、足助はノートに書きとめた。このころ、足助の心のよりどころは、三木清の『人生論ノート』の中の次の言葉であった。

「我々が孤独を超えることができるのはその呼び掛けに応へる自己表現活動においてほかない。（中略）表現することはものを救ふことによって自己を救ふことである。かやうにして、孤独は最も深い愛に根差してゐる。そこに孤独の実存性がある」

夏から秋の間、足助は熊本から一旦上京し、姉の家に寄宿して新大久保の日本易道学校に通い、手相の勉強をした。九州の旅の途上、借りた民家の軒先や街角で乞食扱いを受けることが何度もあった。それで旅の果てで乞食になるにしろ無為に施しを受ける気にはどうしてもなれず、せめて手相見でもしようと思ったのだ。十一月初旬、再び九州の福岡へもどり、下旬に足助は別府鉄輪(かんなわ)温泉に着いた。九州一円の旅の最終地である。一遍はこの地で、文永の役の時に戦功のあった大友頼泰の帰依(きえ)を受け、頼泰の領地から同行を得て、伊予に帰った。これが時宗教団の始まりである。

足助の独り旅にもこの地で奇縁が待っていた。一遍上人湯あみ祭りで知られる永福寺を訪ねた足助は、湯あみ会に使う木像を拝観したが、すぐ奇異な印象がした。足助の怪訝な表情を察し、住職の河野善行師が一言、やはりわかりますか、と訊いた。寄木の像は一度バラすと完全に元通りにはならないんですね、と足助は応える。一遍の顔が心もちふくらんでいる。
善行師は見破ったのはあなたが初めてだ、と驚いた。

十年ばかり前、湯あみの最中に木像がバラバラになったことがあり、腕ききの仏師に修復してもらったのだという。座敷で、善行師と一遍についての話が弾ずんだ。師は奥の間から焼き物の一遍像を持ってきて、あなたは道後に一遍堂という菓子屋があるのをご存知かと訊く。足助は知らなかった。そこの主人の新田兼市という人がこの一遍像を置いて帰ったのだが、道後に帰られたら会ってみられるが良い、と師は足助に勧めた。

新田兼市は、松山の南隣りの砥部町出身の事業家で、足助より一回り歳上である。砥部町は砥部焼の里として名高い農村である。新田は満州の牡丹江で関東軍の支援を受け大きな軍需工場を経営していた。戦後松山に引きあげてからは、モナカの菓子工場を興した。新田が一遍に魅かれるようになったのは、たまたま県外から遊びに来ていた友人から一遍のことを訊かれ、何も答えられないことを恥じたことからである。研究を始め、たちまちかれは一遍のとりこになった。

新田は一遍の名を広めるため、モナカの包装紙に『聖絵』の絵柄を使い、道後に一遍堂を開いた。知人の陶工に一遍像を造らせ店頭で販売した。さらに、宝厳寺境内に一遍史料館の建設を実現しようと市へ趣意書を提出したが、市で取りあげる筈はない。そこで新田は、史料館建設の賛助金を募ろうと全国の時宗寺院を巡り始めた。賛助金どころか、新田の話をまともに聞く寺は殆んどない。新田は賛助金の有無にかかわらず、寺に一遍像を奉納して回る。病膏肓（やまいこうもう）に入（い）るとはこのことで、菓子店の経営は妻にまかせっきりになった。

足助が新田に会った昭和四十六年の暮れ、新田が集めた賛助金は七十万円であった。十年後には史料館を建てたいが、金が集まらなければ店を売ってもいいと新田は真顔でいうのである。二人は意気投合し、二人三脚の旅が始った。

年明けに、山陽と山陰の二十七ヵ寺を車で回った。しかし、この旅は心地よいものにはならなかった。賛助金はさっぱり集まらない。一遍像を置いていこうとすると、押し返されることさえあった。新手の押し売りのように思われたのである。足助にも、車で回る旅への反省があった。旅から帰ると、昼間はアパートに一人こもり、日が落ちるのを待って、市内の目抜き通りの家具屋の前で百円手相見をしながら冬が行くのを待っていた。かれは次のように歌った。

私は生来怠惰
生と死の谷間にありながら
何らパッションをもたず
ただ小さく生きてきた
しかし
孤りの窓で
孤りうたうこともあった

「生きていること」が不思議

宝厳寺の裏山で鶯（うぐいす）の初音を聞いた朝、足助は東京の姉の家を拠点に東北へ旅立つことにした。かれは一遍の研究家でもあった角川書店の角川源義へ一遍への思いを書き綴った書状を投函して松山を発ち、十日後に姉の家へ立ち寄った。すると姉が角川書店から来てくれと電話があったことを告げた。すぐ、書店に行った。企画部長が、「社長があなたのもので何か書いたものがあれば出版してやれといわれるが、何かありますか」と訊（き）いた。足助は大学ノートに書きためたものを半月で清書し、書店に届けた。半信半疑だった。甘い期待をふりきって、その足で、上野から盛岡行きの列車に乗った。

東北は一遍の祖父の眠る江刺（現在の北上市稲瀬町）の聖塚を起点に、南下していく旅になった。一遍の祖父の河野通信は承久の変（一二二一年）で後鳥羽上皇側に参画して捕えられ、この地に配流されて没した。『聖絵』には一遍以下二十一名の時衆が円墳を囲んで念仏する様が描かれている。稲瀬町に今も残る円墳は昭和四十年、『聖絵』をもとに通信の墓と断定された。足助が訪れた稲瀬町の野山には、まだ雪が残っていた。一遍は祖父の墓前で、「身をすつるすつる心をすてつればおもひなき世にすみぞめの袖」

と、捨聖になり切った心境を詠った。足助は肌をさす寒気の中に悄然と立ちつくしながら、捨てようとする心ばかりの自分の浅ましさに体をすくめていた。仙台、会津若松、白河などの宿坊を転々としながら一遍の遊行地を巡り、東京へもどった。

都会はすでに初夏であった。足助は、出版社へ行った。期待はしてなかった。ところが応待に出た女性社員が、足助の書いたものは今工場に入っていると告げた。まさに奇縁だった。足助の最初の著者『捨聖一遍さん』（角川書店）は、このようないきさつで世に出ることになった。一遍を自由にのびのび親しみをこめて紹介した本としては、初めてのものである。

足助に焼き物を勧めたのは、新田である。東北から帰った足助を、新田は砥部の窯元へ連れていった。文字どおり水を得た魚だった。日を追うごとに足助の目は輝きを増した。足助はロクロを回さない。作品はすべて手びねりである。土を手にする。八幡浜学園の子どもたちの顔が浮んでくる。それは足助の好きだった雛人形へ回帰し、やがて母の顔へと移っていく。

徐州から引きあげたころ、足助は「歴史評論」の編集者だった。左翼運動に熱中した。昭和二十二年一月、その日は映画「石の花」の試写会がソビエト大使館であり、招待されていた。栄養失調で病床にあった母は、行かないでくれとしきりにせがんだが、足助はふり切って出かけた。帰ると、母は冷たくなっていた。母は腹の上に煎（い）った塩を包んだ手拭を乗せ死んでいたのだ。息子がいない台所で火をおこし、痛む腹を独りで治療したのである。足助はまだ温りの残る母の腹をいつまでも撫でた。日が経つにつれ、母の孤独な死の有様が頸木（くびき）のように足助の渇愛を制するようになった。やがてかれは、この頸木から自然に放たれるようになるまで、妻帯すまいと決意したのだった。

「住職だけでは生計が立たないし、将来性もない」と言い残し、宝厳寺の僧侶が郷里の仙台へ帰ったのは昭和四十七年の五月のことである。一千三百年の歴史をもつ名刹を空屋にしておくわけにもいかず、檀家総代が交替で宿直をしながら本山へ後任を頼んでいたところ、九月に入って思いがけない人が来た。時宗教学研究所長の浅山円祥である。

浅山は前の年、舌癌の手術を受けていた。治癒はしていた。しかし、

心中秘かに期するものがあった。一遍の生まれた松山を終（つい）の住みかにし、命ある内に『聖絵』に描かれた「予州の窪寺」を探し出したいという願いである。窪寺というのは、一遍が教学の根本を悟った聖地である。著名な浅山の来松で、松山における一遍研究は一気に本格化した。新田兼市らが中心になって呼びかけ、一遍顕彰の文化団体「一遍会」が組織された。

足助に会った浅山は、あなたの本には間違いが一つも書かれてなかった、と目を細めた。足助はこのころまでに、一遍の遊行地の大半を訪ね終え、甲信越と北陸を残すだけになっていた。旅立ちへの衝動はあったが、作陶への情熱も押えがたいものになっていた。

「自然の中を歩くのはいい。吹く風も波の音も山も河も、みんな自分に話しかけてくれるようになった。しかし、また座して土をねるのもいい。土の中から様々な仏の顔が浮んでくる」

昭和四十八年から、「予州の窪寺」の探求が一遍会を中心に始った。そこは、道後から車で四十分ほど東南へ下がった久谷村（現松山市）窪野である。この辺りは三坂峠の麓（ふもと）で、鎌倉時代に修験道の霊地として栄えていたことを証明する五輪塔が、今も段々畑の各所にある。浅山はこの窪野の他にも、足助と連れ立って県内よく歩いた。浅山は巨漢、足助は女のように小柄だが、歩調は不思議とよく合った。浅山の肩書きが物をいうのか、先々で人々は遍路をいたわるかのように親切であった。初夏には、河野水軍の根城のあった能島や来島（くるしま）など芸予諸島の島々を巡った。秋口から、遊行に発つ前の若き日の一遍智真の足跡を訪ね、南予（愛媛県の南西部）の山間を歩いた。

足助はもともと「予州の窪寺」は一箇所ではなく、南予一円の山々ではなかったかと考えていた。八幡浜学園にいたころ、足助は近くの大窪山へ登り、山頂から宇和海に沈む夕日を眺めることを愉しみにしていた。茜（あかね）色に染まる海や山は曼陀羅そのものである。そこへ浅山を案内した。浅山は、「こりゃ、足助さん。あんたの成道地やね」と微笑した。

この年の夏、新田に勧められ足助は一遍堂で砥部焼てびねり展を開いている。

初めての個展だった。地元紙でも好意的に紹介され、野辺の仏や童子、童女のマスコット、それに松寿丸像がすべて売り切れた。秋には、足助と新田はそろってＮＨＫのローカル番組「四国に生きる――私のなかの一遍上人」に出演し、一遍に魅かれる理由を語っている。

足助の独り旅から始った地元松山の一遍研究は、一つのブームにまで高まっていた。足助のもとに地元の新聞や小雑誌から原稿の依頼が届き、講演や文化教養セミナーの講師に招かれた。新田は足助に、「中学生が読んでわかるものを書け。小学生が聞いてもわかるように話せ」と、アドバイスする。「予州の窪寺」の再発見は、郷土史家たちのロマンと功名心を刺激し、一遍会へは様々な情報が寄せられた。また、市内の目抜き通りに編笠阿弥衣の好事家が立ち、念仏の札配りをして、話題になった。

足助は世間から一遍研究家として認められた。しかし、退職金をすっかり使い果し、なおこのように生きていることがかれには不思議だった。新田の支援による個展からの収入と、わずかな講師料で食いつないでいけた。不如意でいることに心も体もすっかりなじんでいたのである。

足助は浅山と県下各地を歩いた旅の中から、還俗して武士として暮らしていた一遍智真が、再出家するまでの期間に的を絞った研究を始めた。このころの一遍智真を知る資料はほとんどなく、謎のままになっている。そのことが足助の想像力をかきたてた。足助は執筆に疲れると、砥部から持ち帰った土をひねる。温泉につかった時や寝床にいる時にふと浮かんだ仏の顔が、土の中から現われてくる。それは最初、母の顔にいつも重った。が、このころは松寿丸や智真の顔がくっきり浮んでくるようになった。足助の部屋にてびねりの作品が並ぶころ新田がひょっこりやってきて、作品を砥部の窯元へ運んだ。

二人の理解者に先立たれる

昭和五十年六月、足助は『若き日の一遍』（緑地社）を世に送り出した。序にかれは次のように書いている。

「いろいろの意味で一遍さんこそ日本の旅人といえるかも知れません。私は、この数年間、一遍上人誕生の四国を中心に、九州、本州と彼の遺蹟を尋ねて歩きました。『分けている霞の中も霞かな』、七百年間ほどの霞がかかっていて、よくはわかりません。聖戒上人の作ってくれたという、あの素晴らしい『聖絵』を頼りにして、ただ歩きました。大変なことだと気がつきました。でももう歩きだしたら、歩くより仕方がないのです。（中略）『一遍さん、今日は』、『一遍さん、何処ですか』。わたしはひょろひょろ歩きました。こうして歩いたおかげか、肩にかけた頭陀袋（ずだぶくろ）にも少しずつ一遍さんの小さな話がたまっていきまし

た。今度、虫干しのつもりで、それらの話をとり出して並べてみました。謎の部分といわれる一遍さんの若い姿を集めてみたのです。独断もありましょう。間違いもありましょう。しかし、乞食袋をさげて追跡したわたくしの『若き日の一遍像』なのです。御批判下さい」

本の出版を誰よりも喜んでくれたのは、浅山と新田であった。この年の初夏、講演会で来松した大岡昇平と司馬遼太郎が宝厳寺の一遍像を拝観したおりに、庫裏の応接間に飾ってあった足助の松寿丸像に目をとめ、ぜひ譲ってくれと所望した。できるものなら沢山送って欲しいという。足助は旅に出て留守であった。

数日後、浅山は事の次第を足助に伝えた。案の定、足助は喜ぶこともなく、今は気が向かないから、とだけいった。浅山はそれ以上は何もいわない。かれは足助の最大の理解者であった。その浅山の癌が再発したのは、一遍上人成道七百年記念行事の一環として久谷村窪野の丹波に建立した「窪寺一遍上人修行地記念碑」の除幕式を終えた直後のことである。浅山の闘病はまる一年の長きに及んだ。

浅山の病室からは三坂峠が手に取るように眺められる。昭和五十一年九月、容体の悪化を聞いて新田が駆けつけると、浅山はベッドに体を起こし、窪野の方向を見やりながら、「一遍に会いに松山に来て、足助に会えて幸せだった」といった。旅に出ていた足助は浅山の臨終に間に合わなかった。葬儀の後、足助は窪野へ行き、何日もつくつく法師の声に耳を傾けていた。

宝厳寺に一遍史料館を建てる計画は、幻に終った。昭和四十七年から八年間、新田は車で日本全国を三周した。訪ねた時宗寺院は約三百ヵ寺。その内半分は足助と、残りは一人で回っている。賛助金を出した寺は四十数ヵ寺だった。新田は史料館にかわって、一遍の名号碑を宝厳寺の境内に寄進した。高さ三メートル三十センチもあり、一遍の名号碑としては日本一大きなものである。この年、古希を迎えた新田は、できるだけ永くこの世にとどまって善根を残したいと足助に語ったが、翌年の昭和五十五年十二月、一遍堂の自宅で妻と共に他界した。不慮のガス中毒死だった。足助は最大の理解者を相次いで失った。

「まだ生かされているのか」

一遍を求めて旅立ち、十年の歳月が流れていた。こんなに命永らえるつもりはなかった、と足助は思う。浅山と新田が足助の元を去り、齢（よわい）六十を越え、寂寞とした思いの中から足助の独り旅が再び始った。『聖絵』や『一遍上人語録』が足助を旅にかりたてるのである。旅の中で出会った様々な仏や観音は、土の中から足助の手によって形を与えられ、現代に蘇ってくる。鬼子母神、弁財天、

伎芸天、吉祥天、聖観音も千手観音も、みんな掌（てのひら）にのる大きさである。知人の書家の掌上石というものがあるとの言葉にヒントを得て、足助はこれらの作品を掌上仏と呼んだ。作品は素朴でやさしい。作為的な表現や技巧がまるでなく、原始的でいて印象はきわめて現代的なのである。足助は展示された高さ十三センチほどの自然仏の横に、「土をのばして　まるめて　ころがして　ぽん。仏さまができました。さしあげたのは耳輪だけ」と書き添えたり、眠る大師の小像に、「弘法さまは橋の下／旅のつかれでねむいのに／川の流れと風の音／寒くてねられぬ大師さま」と詩に語らせるのである。足助の掌上仏は高い評価を受けるようになった。

ＮＨＫの新春のローカル番組に出演したかれは、次のように語っている。

「一遍は民衆と共に日本全土を歩きつづけた。民衆も一遍も南無阿弥陀仏とたからかにうたう。神も仏も人間も、そして山川草木みな南無阿弥陀仏。宇宙の命そのものであった。捨聖一遍は日本の中世を破れ衣をひるがえしながら風のごとくきて、風のごとく去っていった。私の遠い夢は、旅の中で会った一遍の姿を土の中に蘇らせ、掌の上にのせて拝むことであります」。

個展の誘いは東京の銀座の画廊からもくるようになった。誘いに応じて、二度目の個展を銀座で開いた時、一遍を卒論のテーマに選んだという女子学生が足助に手紙をよこした。どの作品を見ても、死んだ母の顔が浮かんできて涙がこぼれて仕様がなかったと書いていた。作陶の根源的なモチーフを鋭くついた女子学生の感性に足助は驚かされた。二人の文通だけの交際は二年ほど続き、結婚の挨拶状が届いた後、音信が絶えた。

昭和五十八年、地元のテレビ局が始めた「えひめ・人と風土」という番組の第一回として「こころの旅人・一遍」を制作することになり、足助はリポーター役として、プロデューサーの藤堂治彦らと岩手県北上市から大分県別府温泉まで、一遍ゆかりの土地を一月かけて回った。

旅の間、藤堂と足助はよく酒を飲んだ。同年輩の気安さもあってプライベートな話も交わした。ある夜、女の話になった。藤堂は、どこかに恋人がおるんでしょうな、と探りを入れた。足助は青年のように顔を赤らめ、「ぼくだって男ですから、恋人が欲しくないことはない。だから、ほら、マスターベーションはしますよ」と律義に打ち明けるのだった。人生の課題云々と大きな風呂敷を広げても、課題を毎日背負って歩くのはいかに大変なことか。足助は、齢を重

ねるにつれ、飄乎 恬澹(てんたん) としてきた。わずかだが、年金もおりるようになった。

行きつけのスナックで酔いにまかせ、「おれのものはこんなにでっかいんだぞ、だからママ、一度愛し合おうよ」と大声をあげ、「捨聖していて、いつまでも捨てきれない男だ」とママから軽くいなされたりする。西行のように、「あわれみし乳房のことも忘れけり我が悲しみの苦のみおぼえて」などとは決して歌わないのである。

アパートに時々、温泉の浴衣姿で見知らぬ人が訪ねてくることがある。戸を開けると、部屋の雑然とした様子にたじろいで、廊下から掌上仏をわけてくれと頼まれる。部屋にあれば求めに応じ、なければ住所を聞いて、送り届けるようにした。陶芸作家としても少しは名が売れるようになったのである。

だが、座して十五年土をねり、二十年をこえて野山を歩き回った今も、足助は道元がわかったと直次郎に言う自信はなく、一遍の姿もつかめない。そして、だからこそおれはまだ生かされているのか、と目覚める度に思うのであった。

この秋、円満寺の尼僧が封書を届けてくれた。あの女子学生からだった。十年ぶりの便りである。短く、「夫と死別し、お四国巡りをしています。道後にやってきて、先生をお訪ねしましたが、旅に出てらっしゃるとのこと、今度の時にお会いするのを楽しみにしています」とあった。足助は万年床にもぐり込んだ。常なるものを見失ったからである、という小林秀雄の言葉がしんしんと心にしみた。足助は風の音を聞きながら、句を詠んだ。

真実に　　生きよ生きよと　　木の実ふる